Ⅰ　全数把握対象疾患の発生動向

1　一類、二類感染症及び三類感染症の発生動向

1)　一類、二類感染症の患者情報

2023 年の埼玉県及び全国の一類、二類感染症の届出数を表Ⅰ-1-1 に示した。

一類感染症は、疑似症患者を含め埼玉県、全国ともに届出はなかった。

埼玉県に届出のあった二類感染症は、結核 762 人で、急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属 SARS コロナウイルスであるものに限る)、中東呼吸器症候群(病原体がベータコロナウイルス属 MERS コロナウイルスであるものに限る)及び鳥インフルエンザ(H5N1 及び H7N9)の各疾患の届出はなかった。

表Ⅰ-1-1　一類・二類感染症の届出数（2023 年）

疾　患　名		埼玉県	全国*
一類	エボラ出血熱	－	－
	クリミア・コンゴ出血熱	－	－
	痘そう	－	－
	南米出血熱	－	－
	ペスト	－	－
	マールブルグ病	－	－
	ラッサ熱	－	－
二類	急性灰白髄炎	－	－
	結核	762	15,377
	ジフテリア	－	－
	重症急性呼吸器症候群（SARS）	－	－
	中東呼吸器症候群(MERS)	－	－
	鳥インフルエンザ（H5N1）	－	－
	鳥インフルエンザ（H7N9）	－	－

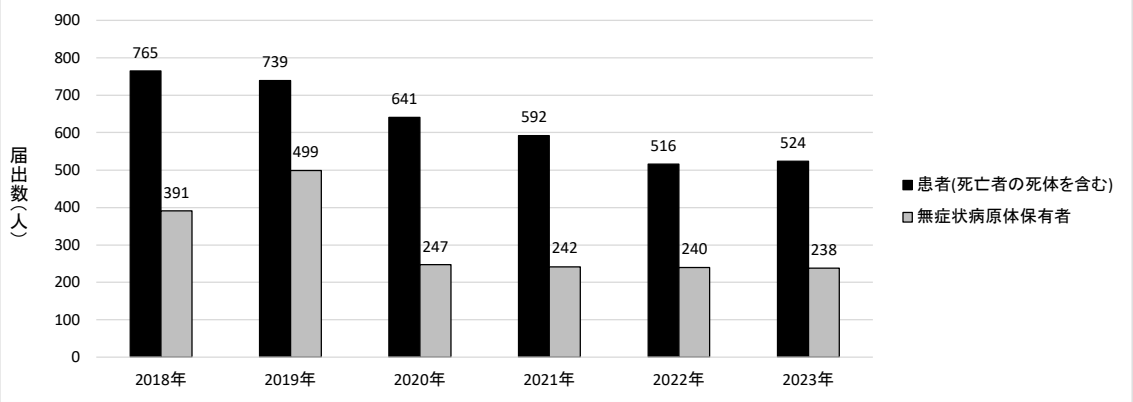
*全国は診断週（1～52週）の集計値　　(－:0)

ア　結核

男性 465 人、女性 297 人の計 762 人の届出があり、前年の 757 人を上回った。類型別では患者 523 人、無症状病原体保有者（潜在性結核感染症）238 人、感染症死亡者の死体 1 人の届出があり、患者は前年の 516 人を上回った(図Ⅰ-1-1)。

男性では患者が 335 人、無症状病原体保有者が 130 人であった。男性は 60 歳以上が 62.4%で、70 歳代 102 人、80 歳代 99 人の順に多かった。女性では患者が 188 人、無症状病原体保有者が 108 人、感染症死亡者の死体 1 人であった。女性は 60 歳以上が 65.0%で、最も多い年代は 80 歳代の 83 人であった(表Ⅰ-1-2)。

年代別の患者の経年推移では、15-64 歳は 2022 年までは減少が続いたものの、2023 年は増加した。また、小児（0-14 歳）の報告は無かった(図Ⅰ-1-2)。

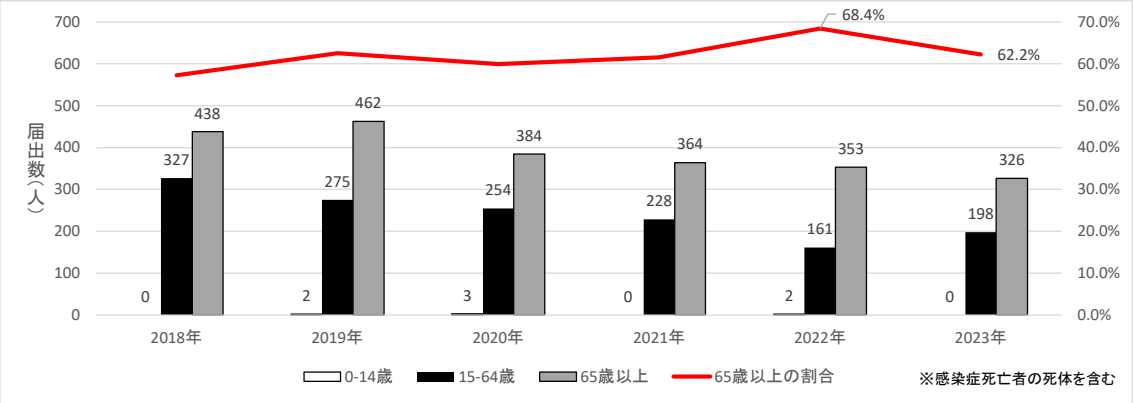


図Ⅰ-1-1　結核　類型別届出数（2018～2023 年）

表Ⅰ-1-2　結核　類型別の性年齢階級別届出数

年齢階級	男性				女性				
	患者	無症状病原体保有者	感染症死亡者の死体	小計	患者	無症状病原体保有者	感染症死亡者の死体	小計	総数
10歳未満	－	12	－	12	－	8	－	8	20
10歳代	－	2	－	2	3	4	－	7	9
20歳代	35	12	－	47	16	11	－	27	74
30歳代	23	12	－	35	14	7	－	21	56
40歳代	22	9	－	31	9	3	－	12	43
50歳代	36	12	－	48	11	18	－	29	77
60歳代	42	24	－	66	17	21	－	38	104
70歳代	75	27	－	102	33	10	－	43	145
80歳代	81	18	－	99	62	20	1	83	182
90歳以上	21	2	－	23	23	6	－	29	52
合計	335	130	0	465	188	108	1	297	762
割合	44.0%	17.1%	0%	61.0%	24.7%	14.2%	0.1%	39.0%	100%

（－:0）



図Ⅰ-1-2　結核　年代別患者届出数及び 65 歳以上の割合（2018～2023 年）

2) 一類、二類感染症の病原体検出状況

一類感染症の検出はなかった。

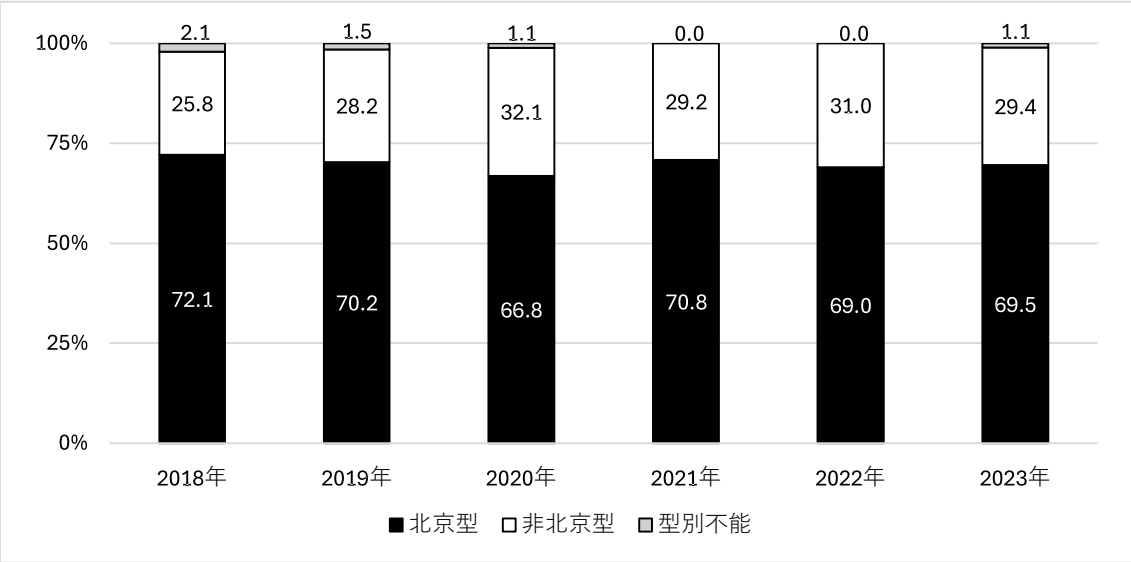
二類感染症の結核菌は、遺伝子中の多重反復配列の反復数を株間で比較する Variable Numbers of Tandem Repeats 法（VNTR 法）等の遺伝子解析を埼玉県衛生研究所及びさいたま市健康科学研究センターで実施している。2023 年に採取された患者検体からの分離菌株 187 株について遺伝子解析を行った。これらの解析結果では、北京型は 130 株(69.5%)、非北京型は 55 株(29.4%)、型別不能が 2 株(1.1%)であった(表Ⅰ-1-3)。さらに、北京型 130 株の系統推定では 86 株(66.2%)が祖先型、44 株(33.8%)が新興型であった(表Ⅰ-1-4)。北京型及び北京型における新興型の割合を過去 5 年と比較すると、北京型の割合は同水準で、新興型の割合は増加した(図Ⅰ-1-3、図Ⅰ-1-4)。

表Ⅰ-1-3　結核菌の北京型別

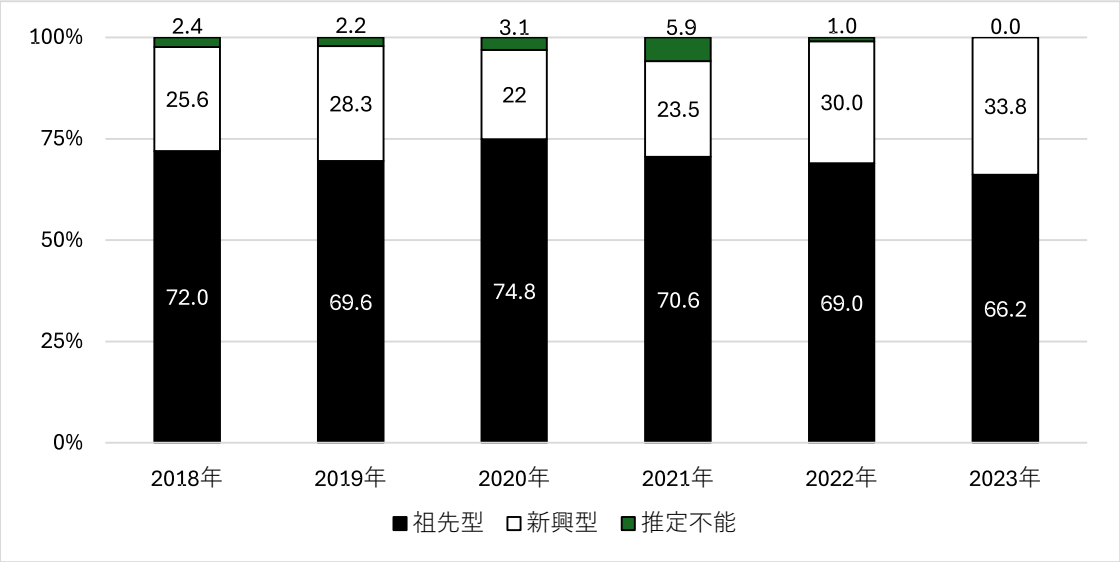
	北京型	非北京型	型別不能
株数	130	55	2
割合	69.5%	29.4%	1.1%

表Ⅰ-1-4　北京型の系統推定

	祖先型	新興型	推定不能
株数	86	44	0
割合	66.2%	33.8%	0.0%



図Ⅰ-1-3　結核菌北京型別割合(2018 年～2023 年)



図Ⅰ-1-4　北京型の系統推定割合(2018 年～2023 年)

3)　三類感染症の患者情報

2023 年の埼玉県及び全国の三類感染症の届出数を表Ⅰ-1-5 に示した。

埼玉県に届出のあった三類感染症は、細菌性赤痢 9 人、腸管出血性大腸菌感染症 167 人、腸チフス 3 人、パラチフス 1 人であった。

表Ⅰ-1-5　三類感染症の届出数（2023 年）

疾　患　名		埼玉県	全国*
三類	コレラ	－	2
	細菌性赤痢	9	47
	腸管出血性大腸菌感染症	167	3,826
	腸チフス	3	39
	パラチフス	1	9

*全国は診断週(1～52週)の集計値　(－:0)

ア　細菌性赤痢

2020 年以来発生が無かった細菌性赤痢は、2023 年は男性 7 人、女性 2 人の計 9 人の届出があった。症例の年齢は 10 歳代から 60 歳代に分布しており、類型別では、患者 4 人、無症状病原体保有者 5 人であった。いずれも診断方法は、便からの分離・同定による病原体の検出であり、菌種は *Shigella flexneri*(B 群)の検出が 6 人、*Shigella sonnei*(D 群)の検出が 3 人であった(表Ⅰ-1-6)。推定感染地域は、国外 6 人（インドネシア 4 人、インド 1 人、フィリピン 1 人)、国内 2 人、不明 1 人であった。

表Ⅰ-1-6　細菌性赤痢（n=9）の届出内容

診断日	性別	年齢	類型	診断方法 / 検体 / 菌種	推定感染地域
1/6	男	20歳代	無症状病原体保有者	分離同定による病原体の検出 / 便 / *S. flexneri*（B群）	インドネシア
3/7	男	20歳代	無症状病原体保有者	分離同定による病原体の検出 / 便 / *S. flexneri*（B群）	インドネシア
3/8	男	10歳代	無症状病原体保有者	分離同定による病原体の検出 / 便 / *S. flexneri*（B群）	インドネシア
7/20	男	40歳代	患者	分離同定による病原体の検出 / 便 / *S. flexneri*（B群）	不明
8/21	女	10歳代	患者	分離同定による病原体の検出 / 便 / *S. flexneri*（B群）	国内
8/28	女	30歳代	患者	分離同定による病原体の検出 / 便 / *S. sonnei*（D群）	インド
10/10	男	60歳代	患者	分離同定による病原体の検出 / 便 / *S. sonnei*（D群）	国内
10/16	男	20歳代	無症状病原体保有者	分離同定による病原体の検出 / 便 / *S. flexneri*（B群）	インドネシア
11/20	男	20歳代	無症状病原体保有者	分離同定による病原体の検出 / 便 / *S. sonnei*（D群）	フィリピン

イ　腸管出血性大腸菌感染症

男性 68 人、女性 99 人の計 167 人の届出があり、前年の 144 人より増加した。症例の年齢は 2 歳から 80 歳代に分布した。年齢階級別では、20 歳代が 45 人と最も多く、次いで 50 歳代が 27 人であった。類型別では、患者 111 人、無症状病原体保有者 56 人で、両者とも前年と比べて増加しており、患者数は 2021 年以降増加傾向が続いている(図Ⅰ-1-5)。O 血清型は、O157 が 109 人(O26 同時検出 1 人を含む)と最も多く、次いで O26 が 15 人であった。年齢階級別では、O157 及び O26 ともに、20 歳代からの検出が最も多かった(表Ⅰ-1-7)。月別の届出数は 6 月及び 9 月が最も多く、共に 26 件であった。また、例年の流行期に該当する 6 月～9 月の届出数は 101 人であり、前年の 91 人と比べて増加した(図Ⅰ-1-6)。

患者における O 血清型別の割合は、O157 が 71.2%（79 人）、O26 が 9.0%（10 人）で、前年に比べ O157 は同水準であり、O26 は減少した。その他の血清型は O111 が 7 人、O18 及び O121 が各 3 人、O103 が 2 人、O48v、O74、O128、O156 及び O167 が各 1 人、OUT が 2 人の計 22 人であった（図Ⅰ-1-7）。なお、無症状病原体保有者では、O157 が 30 人（O157・O26 同時検出 1 人を含む）、O26 が 5 人、O103 が 5 人、O43、O91、O111、O128 及び O146 が各 2 人、O9、O48v、O100、O115 及び O148 が各 1 人、その他に OUT が 1 名であった。

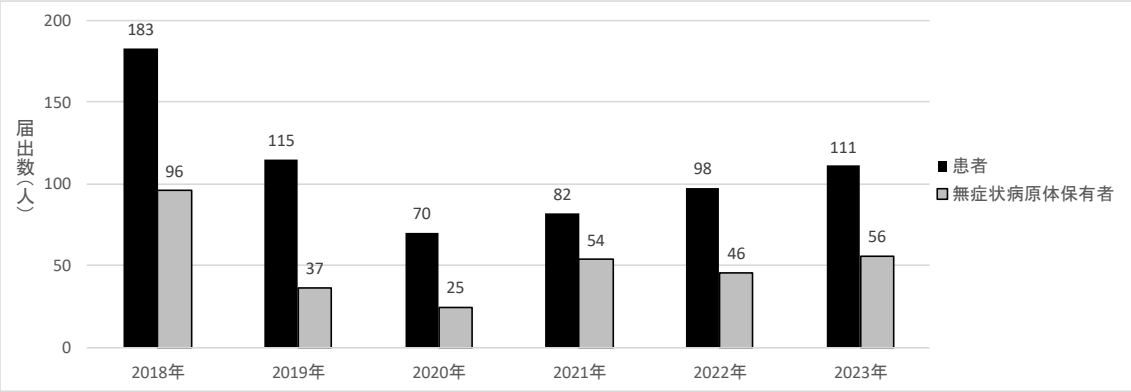
溶血性尿毒症症候群（HUS）患者は、20 歳代及び 60 歳代の女性で各 1 人の発症が確認された。検出された大腸菌の O 血清型及び毒素型は共に O157：H7　VT2 であった。

表Ⅰ-1-7　腸管出血性大腸菌感染症　年齢階級別届出数

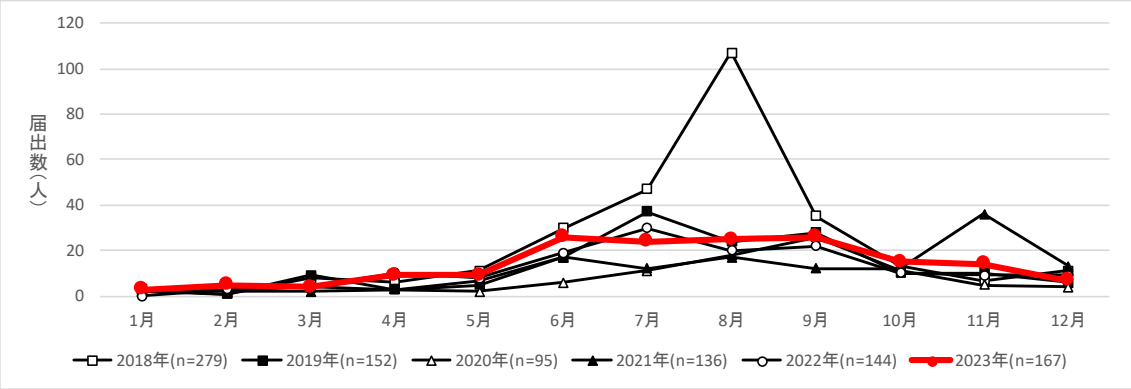
年齢階級	症例数	性別		類型		血清型		
		男性	女性	患者	無症状病原体保有者	O157	O26	その他
10歳未満	12	6	6	11	1	7	−	5
10歳代	22	12	10	15	7	15	2	5
20歳代	45	17	28	30	15	27	5	13
30歳代	17	9	8	12	5	10	2	5
40歳代	16	6	10	10	6	14	−	2
50歳代	27	10	17	16	11	16	2	9
60歳代	14	4	10	6	8	10*	3	1
70歳代	11	4	7	9	2	8	1	2
80歳代	3	−	3	2	1	2	−	1
90歳以上	−	−	−	−	−	−	−	−
合計	167	68	99	111	56	109	15	43
割合	100.0%	40.7%	59.3%	66.5%	33.5%	65.3%	9.0%	25.7%

(−:0)

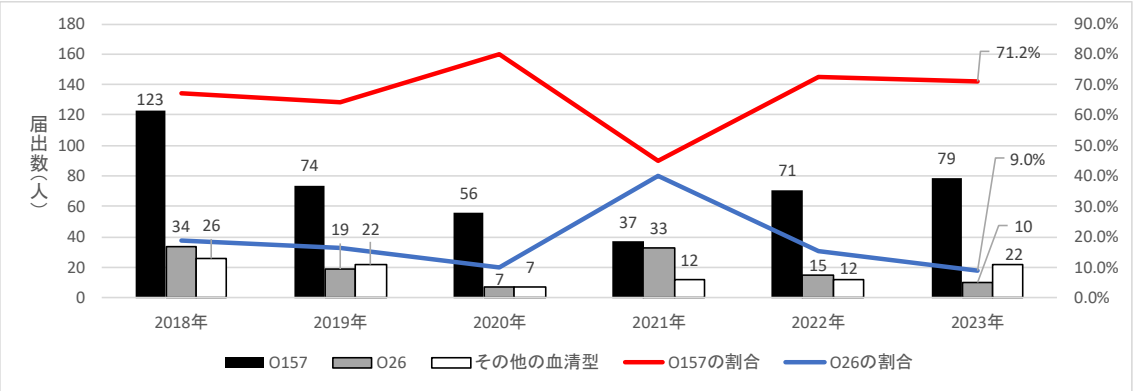
*O157・O26同時検出1名を含む



図Ⅰ-1-5　腸管出血性大腸菌感染症　類型別届出数（2018～2023 年）



図Ⅰ-1-6　腸管出血性大腸菌感染症　月別届出数（2018～2023 年）



図Ⅰ-1-7　腸管出血性大腸菌感染症　患者の O 血清型の届出数と割合（2018～2023 年）

ウ　腸チフス

男性 2 人、女性 1 人の計 3 人の届出があり、前年の 1 人を上回った。類型は患者が 3 人であり、年齢は 10 歳未満、20 歳代、40 歳代で各 1 人であった。診断方法は 3 人とも分離・同定による病原体の検出であり、検体は血液が 1 人、便が 1 人、血液及び便が 1 人であった。推定感染地域は国外 2 人（バングラデシュ）、国内 1 人であった。（表Ⅰ-1-8）

表Ⅰ-1-8　腸チフス（n=3）の届出内容

診断日	性別	年齢	類型	診断方法 / 検体	推定感染地域
1/31	男	20歳代	患者	分離・同定による病原体の検出 / 血液	バングラデシュ
8/15	男	40歳代	患者	分離・同定による病原体の検出 / 血液、便	国内
10/13	女	10歳未満	患者	分離・同定による病原体の検出 / 便	バングラデシュ

エ　パラチフス

2018 年以来発生の無かったパラチフスは、2 月に 10 歳未満の女性 1 人の届出があった。類型は患者で、診断方法は血液及び便からの分離・同定による病原体の検出であった。推定感染地域はネパールであった。

4)　三類感染症の病原体検出状況

ア　細菌性赤痢

県内で分離された赤痢菌の菌種は、*S. flexneri* が 6 株、*S. sonnei* が 3 株の計 9 株であった。このうち 6 株が海外渡航歴のある患者から分離されていた。渡航先はインドネシア、インド、フィリピンであった。国内感染が疑われる株は *S. flexneri* が 1 株、*S. sonnei* が 1 株であった。なお、10 月に *S. flexneri* 2a が検出された患者の陰性確認検体からは、*S. flexneri* 2a のほか *S. flexneri* variant Y も検出された（表Ⅰ-1-9）。

表Ⅰ-1-9　県内で分離された赤痢菌数（2023 年）

分離月	血清型	性別	年齢	推定感染地域
1月	*S. flexneri* 1b	男	20歳代	インドネシア
3月	*S. flexneri* 2a	男	20歳代	インドネシア
3月	*S. flexneri* variant Y	男	10歳代	インドネシア
7月	*S. flexneri* 2a	男	40歳代	不明
8月	*S. flexneri* 2a	女	10歳代	国内
8月	*S. sonnei*	女	30歳代	インド
10月	*S. sonnei*	男	60歳代	国内
10月＊	*S. flexneri* 2a	男	20歳代	インドネシア
11月	*S. sonnei*	男	20歳代	フィリピン

＊: 陰性確認検体から、*S. flexneri* variant Yも検出

イ　腸管出血性大腸菌感染症

県内で分離された腸管出血性大腸菌は 161 株であった。血清型別では、24 血清型が検出された。最も多く検出された血清型は O157:H7 で 102 株（63.4%）であった。次いで O26:H11 で 14 株(8.7%)、O111:H-と O103:H2 がそれぞれ 7 株ずつ(4.3%)であった。毒素型では、VT1＆2 が 68 株(42.2%)、VT2 が 63 株(39.1%)、VT1 が 30 株(18.6%) であった。なお、O157:H-(VT1&2)と O26:H11(VT1)が同時検出された症例が 1 件あった。また、O103:H2(VT1)が検出された患者の陰性確認検体から、O103:H2(VT1)のほかOUT:H21(VT1&2)も検出された症例が 1 件あった(表Ⅰ-1-10)。

表Ⅰ-1-10　腸管出血性大腸菌の血清型と毒素型（2023 年）

血清型	毒素型			計
	VT1	VT2	VT1&2	
O157:H7	−	44	58	102
O157:H−	−	1	5*	6
O26:H11	12*	2	−	14
O26:H−	1	−	−	1
O111:H−	5	−	2	7
O111:HUT	1	−	−	1
O103:H2	6**	−	1	7
O121:H19	−	3	−	3
O9:H−	−	1	−	1
O43:H2	−	2	−	2
O48v:H−	−	2	−	2
O74:H−	−	1	−	1
O91:H−	1	−	1	2
O100:H−	−	1	−	1
O115:H10	1	−	−	1
O128:H2	1	−	1	2
O146:H21	−	1	−	1
O146:HUT	1	−	−	1
O148:H18	−	1	−	1
O156:H25	1	−	−	1
OUT:H7	−	1	−	1
OUT:H45	−	1	−	1
OUT:H−	−	1	−	1
OUT:HUT	−	1	−	1
合計	30	63	68	161

*:2つのO血清型（O157 1件、O26 1件）が同時検出された症例を含む

**:6症例中、1症例の患者の陰性確認検体から、OUT:H21(VT1&2)も検出

ウ　腸チフス

腸チフスの原因菌であるチフス菌は 3 名の患者から 4 株分離された。1 月に分離されたチフス菌のファージ型は DVS で、10 月に分離されたチフス菌のファージ型は UVS4 であった。どちらもバングラデシュへの海外渡航歴があり、発症状況から国外での感染が疑われた。8 月には同一患者から便由来と血液由来の 2 株が分離された。どちらもファージ型は DVS であった。渡航歴がなく、国内感染が疑われた。

表Ⅰ-1-11　チフス菌の分離状況（2023 年）

分離月	血清型名	性別	年齢	ファージ型	推定感染地域
1月	*S*. Typhi	男	20歳代	DVS	バングラデシュ
8月*	*S*. Typhi	男	40歳代	DVS	国内
8月*	*S*. Typhi	男	40歳代	DVS	国内
10月	*S*. Typhi	女	10代未満	UVS4	バングラデシュ

*同一患者から2株分離〈便由来、血液由来〉

エ　パラチフス

パラチフスの原因菌であるパラチフス A 菌は、1 月に 10 歳未満の女性から 1 株分離された。ネパールへの海外渡航歴があり、発症状況から国外での感染が疑われた。ファージ型は１であった。